

3 地域スポーツや総合型クラブが 2020年東京オリンピック・パラリンピック に向けてできること

地域スポーツが2020年
オリンピック・パラリンピックに
向けできること

師岡 「地域スポーツ」という視点で、
2つお話しします。

1つ目は、とにかく今はスポーツに
「追い風」が吹いている状態ですので、
今までスポーツに関係がなかった方々
にも呼びかけ「スポーツを通じた地域
活性化」という共通認識を地域で持つ
ことができるという点です。ただし、
ここで気をつけていただきたいのは、
まずは自分たちがオリンピック・パラ
リンピックに対して何ができるかを考
えることが先であるということです。

私は、昨年9月の講演(注1)後、様々
な地域で講演を依頼されました。そこ
では、地域の方から「オリンピックで地
域が活性化しますか」等の質問をいた
だきます。しかし、日本はオリンピッ
クを立派に開催することを世界に約束
したわけですので、まずは私達人ひ
とりが「何ができるか(What)」を考
えることが先であり、それを考え実行す
ることで、「恩恵を受ける(Take)」こと
ができるのです。

また、よく「地方には関係がない」と
いう話を聞きますが、そんなことはあ
りません。文部科学省が先日(2014
年1月14日)、公表した「夢ビジョン
2020(注2)」にも取り上げられて
いますが、私は長野オリンピックの際に

行った1校1国運動を参考に、「1市町
村1国運動」を提案しています。多く
の発展途上の国々はオリンピックの直
前合宿を行う金銭的余裕がありません。
そこで市町村を挙げて体育施設や
民宿を用意して、それらの国々の直前
合宿場所として提供します。滞在費な
どを市町村が負担する代わりに地域の
学校や施設に訪問してもらい、子ども
達や地域住民と交流してもらいます。
そういった取り組みは、必ず感謝され
るでしょうし、地域の子どもたちにとっ
ては、たとえ有名な選手でなくても、
国の代表選手と触れ合う機会を得るこ
とで、1964年当時私が経験したよ
うに「世界」を体感できることでしょう。

こういった取り組みは、2002年
のサッカーワールドカップでカメルーン
代表を受け入れた大分県中津江村(現
日田市)のように、実は全国の市町村
で実施できますし、それが本当の意味
での「おもてなし」であると思います。
また、こうした取り組みの運営主体を
総合型クラブが担うことができれば、
クラブの認知度向上にもつながります。
2つ目は、地方行政のスポーツ振興
に拍車がかかるということです。地方
においても、必ずオリンピックに向け
て「我が地域では何をすべきか」とい
うテーマが議会などで取り上げられる
でしょう。私はその前に、地域スポー
ツ団体が自ら積極的に提案していくべ
きだと思えます。



注1)
師岡氏は、2013年9月8日に開催された、
「2020年オリンピック・パラリンピック開
催地決定を迎える会」において、「招致活動
で得たもの」をテーマに講演を行った。

注2)
夢ビジョン2020(文部科学省版)について
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/01/1343297.htm

例えば、オリンピックに関連して、今後全国的に行われる活動として聖火リレーがあります。1964年の時には、聖火リレーは太平洋戦争の激戦地だった沖縄からスタートしました。当時、返還前で日本国旗を掲げることができなかった沖縄県で日の丸のユニフォームを付けて走る姿が人々の感動を呼びました。そのように、我が地域



を走る意味を伝えることができれば、聖火リレーを自分達の町に呼ぶことができるかもしれません。

さらに言えば、「生涯スポーツの核たるクラブの拠点施設を聖火リレーが通るべきだ」という提案もできると考えられます。

クラブが2020年

オリンピック・パラリンピックに向けてできること

菊地 クラブとしてできることは、師岡先生とお話する中でたくさん出て

きましたし、クラブであれば実現可能だと思っています。私が住む神奈川県川崎市においても、2020年に向けて運動施設の改修などの話題が出ています。クラブとして大事なことは、自分達が持つ資源を活用しながら思い切った取り組みをみることです。そして、自分達には何ができるのかということ、夢を持って語り合うことでしょう。

師岡 私が所属する上智大学では、

2019年ラグビーワールドカップと2020年オリンピックに向けて大学としてできることを検討する全教職員を対象としたプロジェクトを立ち上げました。それと同様に、クラブが主体的に地域の議員や町内会の役員や商店街など、様々な人達を集めて、地域でオリンピックに向けてできることについてアイデアを出し合うという活動をし

てみてはいかがでしょうか。例えば、まだどこの国とも姉妹都市になっていない国と姉妹都市提携するというアイデアは面白いと思います。また、個々のクラブ単位では、オリンピック種目の紹介やオリンピック選手を招聘したイベントの開催ということも考えられるでしょう。

クラブこそパラリンピックを

応援しましょう！

師岡 パラリンピックの話をしします。

『オリンピック憲章』の「オリンピズムの根本原則」には、「スポーツを行うことは人権の1つである」「すべての個人はいかなる種類の差別もなく、オリンピック精神によりスポーツを行う機会を与えられなければならない」と書かれています。このオリンピズムの原則はクラブにも共通している考え方だと思えます。障がい者、健常者分け隔てなく参加できる総合型クラブ運営をして、パラリンピックを特に積極的に応援してほしいですね。

菊地 私のクラブには障がいのある方も所属していますが、その方々もオリ

ンピックの開会式に何かしら参加できないかと思いを馳せています。障がいのある方でも参加できるクラブだからこそ、オリンピックだけでなく、パラリンピックに向けた活動も展開できるのではないかと思います。

「おもてなし」のために「地域を知る」「国を知る」

師岡 オリンピック・パラリンピック

を通じて、日本人は、「自分たちの地域にある魅力」や「日本のスポーツが持つ魅力」に気づくことも必要です。先ほどからお話ししている「自分達ができること（＝おもてなし）」を考える上では、「自分の地域」について知らないという文化はできません。また、スポーツ文化に関しては、必ずしも西欧スポーツ文化だけが素晴らしいというわけではなく、日本の武道が持つ所作や礼儀、「心技一体」という考え方や、日本にも世界にアピールすべき文化があると思えます。こういった自分たちの地域や国が持つ魅力にも目を向けてみる必要がありますね。

まとめ…総合型クラブと

2020年東京オリンピック・

パラリンピックは

どのように関わるか

菊地 2020年オリンピックに向けて

は、個々のクラブによる取り組みとSC全国ネットワークのようなネットワーク組織による取り組みという2つの視点で考える必要があります。個々のクラブにおいては地域の様々な団体を巻き込んで、SC全国ネットワークにおいてはクラブ同士で集まって、色々なアイ

テアを出し合うことが、これからまず取り組むべき事柄だと思えます。

現在、クラブが抱えている大きな課題としては、クラブの「自立・自律」「認知度向上」の2つがあります。オリンピックは、これらの課題を解決するチャンスであり、SC全国ネットワークが一つの目標に向かってまとまるチャンスでもあると思います。そのためには、個々のクラブがそれぞれの地域で積極的にオリジナリティのあるアイデアを関係各所に提案していく、そして各クラブの取り組みをSC全国ネットワークが責任を持って取りまとめていく、ということが必要になってくるでしょう。

現在、私が所属している(一社)神奈川県総合型スポーツクラブ連絡協議会(KSN)では、2020年オリンピックに向けて、全加入クラブで英語教室の展開を始めています。英語ができれば、ボランティアをしたくてもできませんので、多くの方が、オリンピックまでには英語を怖がらずに話せるようにしていきたいと思えます。

師岡 総合型クラブが2020年までに取り組むべき事柄について、4点お話しします。

1つ目は、オリンピックの開催を通じて、レガシー(遺産)を開催地に残さなければならぬということです。『オリンピック憲章』には、「IOCの使命と役割」として「オリンピック競技大会の良い遺産を、開催国と開催都市に残

すことを推進すること」と書かれています。日本の場合、それは超成熟社会においてスポーツによって人々が幸せに暮らすことのできる立派な社会であることを世界に示すことです。つまり、世界に生涯スポーツ社会としての日本を見せるということです。そして、その活動主体は国民一人ひとりですが、核となる組織は総合型クラブだと思います。

2つ目は、これまでスポーツに関心のなかった地域住民に対してもアピールできる機会ができたということです。スポーツに限らず、オリンピック関連の活動を総合型クラブが行うことで、地域の方々に関心を持ちます。その方々を巻き込んでいくことで、クラブが地域を盛り上げる「軸」となります。

3つ目は、「情報の共有・ネットワーク化」です。私は、都体協の総合型クラブ育成委員として、また千代田区クラブ設立準備委員長としてこれまで活動してきましたが、そこで感じたのは、「クラブ間で情報をもっと共有化すべき」ということでした。そこで、(一社)東京スポーツリンクの副理事長として、都内全クラブを束ねて情報公開にも取り組みましたが、全国規模のネットワークを構築する必要があると思っています。約3400のクラブが一つになり行動を起こすことができれば大変大きな力になると思えます。

4つ目は「するスポーツ」の拡大につ

ながるということです。オリンピック競技大会自体には、一般の方は「見る」「支える」という関わり方しかできませんが、「見る」「支える」を通じて、「する」につなぐと思えます。2021年5月には誰でも参加できる「ワールドマスタースゲームズ」が関西で開催されます。この流れを活かして、スポーツをしていない方が、生活習慣としてスポーツを行う社会に変化させていくことが大切です。クラブが果たすべき役割は「する」場所の提供にあります。最近では、アルツハイマー病の予防・改善に有酸素運動が効果的であることが証明されたそうです。医療費削減のためにもスポーツを「する」場所を提供する総合型クラブに寄せられる期待は大きいと思えます。

終わりに

師岡 「6年後」という期間が大変良いと思います。「10年後」だとまだ先のこのように感じますが、「6年後」は、意外とすぐにやってくるという感じがします。したがって、「今、行動しよう」という気持ちを私たちに抱かせてくれる現実的な数字と言えます。

また、オリンピック憲章(注4)を読んだことがある方は意外と少ないです。ので、ぜひ一読していただきたいですね。

(終了)

■師岡 文男(もろおか ふみお)

上智大学文学部教授(保健体育研究室長)。日本オリンピックアカデミー前理事。世界最大のスポーツ組織、国際スポーツ団体総連合(スポーツアコード)前理事。東京都スポーツ振興局招致推進部アドバイザー。文部科学省科学研究費受給研究「オリンピック競技大会の招致問題に関する総合的研究」をはじめ、オリンピック・パラリンピック競技大会に関する造詣が深い。また、東京都のスポーツ振興を目的とした「(一社)東京スポーツリンク」の副理事長として、総合型地域スポーツクラブの振興にも携わっている。昨年(2013年)、東京商工会議所で開催された招致委員会・東京都共催「2020オリンピック・パラリンピック開催都市決定を迎える会」において、「招致活動で得られたもの」をテーマに講演を行った。

■菊地 正(きくち ただし)

NPO法人高津総合型スポーツクラブSELF副理事長。神奈川県川崎市で平成18年に学校を拠点として同クラブを設立。会社経営で培ったノウハウとリーダーシップを発揮し、地域から愛されるクラブづくりに尽力している。クラブは、文部科学省「地域スポーツとトップスポーツの好循環推進プロジェクト」事業を受託し、「拠点クラブ」としても活動している。現在、公益財団法人日本体育協会地域スポーツクラブ育成専門委員会中央企画班員、日本体育協会総合型クラブ公式メールマガジン編集委員長を務める。